

## 令和元(2019)年「宝石山正覚寺報」9月号

## ご案内

お聴聞は、如来様の促しにあいお念仏しつつ終にお喚び声に遇わせて戴く大切な営みです。

皆様どうぞご縁におあい下さいませ。

**仏壮お聴聞の会** 9月1日(日)20時~。

仏教壮年会恒例となったお聴聞の会です。皆様賑やかにご縁にお会い下さい。

**仏婦例会** 9月16日(月)19時半~

月に一度、如来様のお育てに合う大切な機会です。皆様賑やかにご参り下さい。

**秋の彼岸会** 日程未定

恒例の秋の彼岸会法要です。永年掘り起こし確認し続けて来た“浄土真宗の救いのお法り”を端的にお取り次ぎさせて戴きます。どうぞ皆様こぞってお運び下さいませ。

**お聴聞のお同行がお浄土へと旅立たれました**

八月後半、その時がやって参りました。ある朝お二人のお同行が前後して息を引き取られ、お浄土へと旅立って行かれたのです。

葬儀次第一切の御世話をさせて戴く住職には、地域のお通夜のお参りの姿の違いが否応なく目に飛び込んで参りました。考えないでおこうと思っても自然に考えさせられずにはおれないことになったのです。

それはどういうことかと申しますと、南比良では、お通夜のお参りは、先頭から一席も空席にすることなく、まことに厳かなお聴聞のお姿を表して下さったのです。いろんな背景が考えられますが、訃報のご案内が区全域に及んでいたことがうかがわれました。

一方の北小松のそれは、言葉が憚られますが、ご遺族の席の反対側は、先頭から数列が空席がありました。訃報のご案内が町内に留まり、お参りが遠慮がちになったからかと窺われました。

たまたま、直後の八月二十五日の正覚寺の夏のご法座「歓喜会(盂蘭盆会)」にお参り戴いた御門徒さんの口から「新聞で初めて知った」などの御言葉が聞こえてきたからです。

ご法座が終わったところで、住職は、お参りの皆様方におはかりする形で事態を申し上げ、皆様に「一緒にお聴聞してきた御門徒さんが亡くなられたときは、せめてみんなでお見送りしたいですね。在所では区全体に訃報を伝達する習慣がなくなったとしても、同じ願い寺のお同行がお見送りできる自然な気持ちを大切にしたいですね。これからは、総代様方はじめ皆さんで知恵を絞って戴きたいですね」と申し上げたことでありました。

ご本堂で営む歓喜会は、お聴聞の為の本格的な大切のご法座、お通夜や葬儀式は、お同行とのお別れに際して、無常の世に改めて仏縁とお聴聞の姿勢を問い直す大切のご縁でありましょう。曾てお元気だった村の長がお浄土にお還りになった後、ご法座が淋しくなったと感ぜられることは現在の村の長のお聴聞の姿勢を問う指摘にならざるを得ないのではありますまいか。

北小松のお通夜の席で導師は切り出しました。「前の席が数列も空いている姿は、働き続けていて下さる如来様のお慈悲に背を向け逃げている姿、これが私の偽らざる姿だったですね」と。

南比良のHさんにお許しを得て最後によいお話しをご紹介します。いままさに斎場の火葬炉の扉がしまらんとするとき、「おやじ、ありがとう」と、お浄土にも届き胸底に響く言葉が耳を揺るがせました。導師までもが胸を揺さぶられ思わず涙をこぼさずにはおれませんでした。

如来様から賜ったお念仏を称えるとき、直ちに聞こえて下さるお名号こそは如来様直々のお喚び声、法の働きだったのであります。合掌。